

健康文化

発達障害がある成人、高齢者へのライフステージから捉えた支援

辛島 千恵子

[はじめに]

2011年、健康文化45号には、「名古屋市特別支援教育と作業療法」というテーマで執筆させて頂きました。あれから6年経ち、名古屋市特別支援教育^{*1}作業療法士の専門家チームも「通常の学級」の訪問数、相談件数は過去最大となりました（年間の訪問校数：2008年から2015年の平均訪問数51校、2016年の訪問校数80校 年間の総対象児童数：2015年の平均総対象児童数115名、2016年の総対象指導数153名）。これらの結果からは、名古屋市の小学校において、作業療法士は何ができる専門家であるかということが、認知されて活用されていることが伺われます。私たち発達障害を専門とする作業療法士にとっては、訪問活動の大きな成果と考えています。

さて、発達障害がある幼児、児童生徒さんへの支援が展開される一方でまだまだ、支援の立ち遅れが顕著なのは、知的障害と発達障害が重複する高齢者です。福祉施設に入所している24%が60才以上で、50才台と合わせると44%を占めています。彼らが暮らす地域や福祉施設における高齢者への支援が大きな課題となっています。これは、発達障害者支援法に謳われているライフステージにそった包括的視点からも重要なことです。元来幼児期の支援は、児童福祉法などにより、1970年代後半から地域母子通園施設で展開し始めました。そして、この10年間では発達支援センター、児童支援事業などが加速度的に増えて家族を中心に捉えた支援が充実しつつあります。その反面、そのような子どもたちが大人になって共生生活を営むための地域の受け入れや福祉施設、グループホームなどの数や支援内容が立ち遅れています。特に福祉施設では、高齢化による支援の見直しが迫られているのが現状です。まだまだ、発達障害がある子どもたちや家族が安心、安全、豊かに暮らすためには多くの課題があります。

本稿は、作業療法学の視点から知的障害をともなう発達障害がある成人、高齢者（以下、高齢発達障害者）へのライフステージから捉えた支援についてまとめます。

[知的障害をともなう発達障害がある子ども、成人の心身機能、活動の特徴]
知的障害をともなう発達障害がある子ども、成人の心身機能、活動の特徴を作業療法学の視点からまとめたものを以下に示します。

1. 基本的日常生活活動（食事、着替え、排泄、整容）などを遂行するために必要な姿勢・運動の障害がある
2. 感覚調整機能（環境に存在する感覚刺激の感じ方）は、鈍いと過敏が混在している場合が多く、活動や学習を阻害する
3. 応用的日常生活活動（集団のなかでのさまざまな活動や作業、地域生活に必要な技能など）を遂行するためのスキルの発達や学習が遅れる
4. ことば、動作、声などによる象徴的コミュニケーションや2者関係の情動的コミュニケーション^{※2}の発達が遅れる
5. 4の発達が遅れることで対人・コミュニケーションの二次的障害へ繋がる
6. 2と4、5が重なり行動障害を引き起こし、それに加えて施設生活による物理的、人的制約から強度行動障害^{※3}へと発展する可能性がある

[高齢発達障害者の特徴]

いくつかの調査^{1) - 3)}をまとめものを以下に示します。

1. 健常成人よりは10歳から20歳早く高齢期相当の身体機能となる
2. 生活習慣病が早期から始まる
3. 更年期（不安、イライラ）や施設生活の制約（生活のスピード、多くの人との生活、自分のペースが保てない、感覚の過敏、鈍さ）という環境から生じる負の因子が対人関係に影響を与える
4. 運動機能、認知機能（判断）の低下が日常生活へ影響（悪循環）する
5. 長い施設生活から生じる不満や対人関係性の固執（介護者も本人も行き詰る）が強まる
6. 40歳代から新たな病気と体の変化が負の因子となり精神面や行動面、対人関係へ影響
7. 1から4が重なり合い、生活リズムが乱れる

生活支援のなかでは、このような加齢に伴う変化が20歳台から30歳台にかけてすでに進行していることに支援者は気づいていることが多いと言われています。上記の特徴4からは、高齢発達障害者の日常生活や人との関係性を保つためには、感覚や運動への持続的な取り組みを幼児期から継続することが大切です。このような感覚-運動機能への幼児期、学童期から継続した取組が2の生活習慣病予防となる運動習慣に繋がります。また、同時に感覚-運動機能への

取組が行いやすい人的、物理的資源を備えることも重要です。感覚-運動機能は、幼児期からの家族と子どもの地域における普通の生活の営みのなかで発達します。保育園に通う、お買い物に行く、日曜日にプールに行くなどの楽しい活動を紡ぐことが、「できる」ことを支えています。つまり、高齢発達障害者の施設は、彼らが施設に入所する前の地域生活をできるだけ保障する環境作りをすることが、健康な生活をも支えることに繋がるのだということを理解しておかなくてはなりません。しかし、施設では運営上ギリギリの職員で支援を行っているため、支援者と共に散歩や買い物に行くことにも制限が生じます。ましてや行動障害がある場合は、生活の制約が強くなります。このような環境は、多くの高齢発達障害者の感覚過敏や鈍さにも影響を与えます。彼らの日常生活の環境から発生する感覚に対する感じ方を通じて表出される行動は、他者からは不可解で、不適応な行動として観られます。例えば、聴覚や触覚の過敏性がある高齢発達障害者は、人の多い混み合った食堂や浴室は、とても苦手です。その特徴を理解せず、彼らを環境に適応させようとするために、言葉で励ましたり、時には叱責することが逆にその場から逃げ出したり、大声を出すなどの行動障害を二次的に促すことに繋がっています。そして、それに気づかずに支援者が悩んでいることも多いようです。このような負の連鎖を少しでも断ち切るための方策を見出すことがよりよい支援へと繋がります。3と6は、健常成人が迎える加齢に伴う変化が早い時期に生活上の負の要因となり、その他の特徴を強調させる結果となります。

[ライフステージから学ぶ支援の方途]

幼児期から学童期、青年期前半までは療育や教育という枠組みで知的障害を伴う発達障害がある子どもたちや青年の特別な教育ニーズを明確にしてそれに見合った医療や教育支援を行う取組が特別支援教育の枠組みで保障されつつあります。そのような支援の展開のなかで、多くの子どもたちや青年が家族と生活のいとなみの中で時間をかけて、情動的コミュニケーション^{※2}と象徴的コミュニケーションの基盤が育成されます。これらの基盤は、私たちが生きて行くための基本的ニーズでもあり、これにより安心と信頼関係が育まれます。そして、このような乳幼児、学童期で生まれたコミュニケーションが高齢発達障害者の施設生活においても支援の柱とすることが大切です。以下にライフステージから学んだ支援について述べます

1. 健常成人が迎える加齢の変化を理解して、早期からそれを見逃さずに生活習慣病、その予備軍的な兆候を把握する

2. 個別支援計画を他職種で計画する

- ①日常生活活動の支援のなかに運動機能、認知機能、対人機能を促す内容を網羅する。
- ②一日の生活でスポットをあてる活動を選択する
対象者が好きな活動、積極的になれる活動（特に屋内、屋外の特徴）、対象者の好きなスタッフが関わる活動または、好きな仲間が参加する活動など
- ③活動と支援を工夫する
 - ・対象者のできることから少しずつ、苦手なことへの関心を広げる
 - ・対象者の粗大運動、巧緻運動、意欲などのレベルに応じて活動の難易度を変化させる
 - ・場所や設定の構造化（視覚的な分かりやすさ）
 - ・触覚、聴覚の過敏性と共に自分の体の感覚（固有感覚、前庭感覚）に対して鈍い傾向がある。そのため、少数人数での活動、言葉での指示や威圧的な指示は避けて、写真、絵を利用して分かりやすくする。
 - ・感覚過敏などが無い場合は、体に接触して他動的に教える
 - ・モデルを見せる
 - ・多くの言葉での指示は避けて、身体、動作（象徴）言語と簡単な言葉による指示を心がける

[おわりに]

作業療法学の視点から知的障害をともなう発達障害がある成人、高齢者へのライフステージにおいて継続する支援と加齢に伴う変化に対する支援の方向についてまとめました。発達障害があることで生じる特別なニーズは発達、加齢に伴い変化します。その変化を正しく捉えるためにも専門家の協働による支援と well-being の具現化に向けての努力が必要です。

- ※ 1：名古屋市特別支援専門家チームの訪問活動は、2007年から開始。
- ※ 2：二者関係において、その心理的距離が近い時に一方または双方の気持ちや情動の繋がりと共有を目指して関係を取り結ぼうとする営み
- ※ 3：医学用語ではなく、自傷行為、他傷行為で処遇困難となり、支援を要する一群

文献

- 1) 植田章：知的障害のある人の加齢と地域生活支援の実践的課題、佛教大学

社会福祉学部論集、6(3)：19-32, 2010.

- 2) 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみ園：高齢知的障害者支援のスタンダードをめざして(素案)、平成26年度厚生労働省科学研究費補助金事業、2014、国立のぞみ園セミナー配布版、2014.
- 3) 春日井宏彰、菅野敦、橋本創一他：成人知的障害者の加齢変化の特性に関する研究—質問紙を用いた調査による研究—東京学芸大学紀要 総合教育科学系57：481-494, 2006.

(名古屋大学大学院医学系研究科 教授)

